

(ひと) 奥野長衛さん

全国農業協同組合中央会の会長に就任した

「大変や、農協の理事になつとるで」。1992年、旅行から戻ると、妻の話に慌てた。兵庫県内に出店した地元産野菜の漬物店が軌道に乗っていた。なのに、JA伊勢(三重県)の理事就任が、地域の「互選」で内定していた。

「欠席裁判じゃないか!」。そう抗議すると、地元の有力者から「ムラで決めたことには従うもんだ」と諭された。組合員一人ひとりが対等なはずの協同組合は、実際には「上意下達」だった。

JAの職員経験もないまま理事に就いてみると、上部団体の意向を気にして組合員を軽く扱うような農協の体質に疑問がわいた。2007年に組合長になると、組合員に封筒を配って匿名で意見を募った。上司の部下への扱いなど普段は聞けない不満が集まった。

農協グループを束ねる全国農業協同組合中央会(全中)の理事になってからも、不透明な運営のあり方を批判してきた。全中の権限を大幅に減らす「農協改革」が決まり、万歳章会長が辞任表明すると、水面下の調整に従わず会長選に立候補した。10年ぶりの選挙を予想を覆して勝ち抜き、11日の臨時総会で就任した。

「東京中心のピラミッド構造を改め、風通しをよくする」。スマホやタブレットを使い、気軽に連絡を取り合える「垣根の低さ」が持ち味だ。「私こそが農協組織の底辺。お役にたてるよう、御用聞きに伺うだけです」

(文・写真 大畑滋生)

JA三重会長の紹介 &メッセージ



JA三重中央会会長
奥野 長衛

JA三重中央会会長の奥野長衛(おくの・ちようえ)でございます。日頃から、JA事業に対しご理解・ご協力いただき、誠にありがとうございます。私たちJA三重中央会は、三重県のJAグループの代表機関および指導機関として位置付けられており、相互扶助の精神に基づくJA運動の実践によって、三重県農業の持続的な発展と安心して暮らせる豊かな地域社会を実現することを目的としています。その目的の達成に向けて、JAや連合会の指導、監査、教育・研修そして農政運動、広報活動などさまざまな事業に取り組んでいます。さて、現在、農村では農業者の高齢化や担い手不足などにより生産基盤が弱まっており、農業・農村の維持が困難な状況となっています。また、農政面においても、農業施策の転換や外国との貿易交渉など情勢が刻々と変化しております。こうした中、大震災をきっかけに「絆」、「共助」などの価値観が浸透し、国内生産を基本とした農業や食の安全・安心への重要性が再認識されております。この状況を踏まえ、JAグループ三重は「協同の力」を発揮して、今後も持続的な農業を行える仕組みを再構築するとともに、食の安全・安心に対する消費者ニーズの高まりに的確に対応し、国産とりわけ地場産の農畜産物を安定的に供給する事業を拡大していきます。そして、JAグループ三重全体としての事業伸長や効率化対策を強化することにより、競争力のあるたくましいJAづくりに向けて取り組みを進めてまいります。「農」が「食」を作り、「食」は「くらし」と「いのち」を守っています。私たちJAグループ三重は「食・農・いのちを大切に! 地域の元気を応援します」をテーマに、組合員・地域住民の皆様への負託に応えることができるよう、役職員一丸となって取り組んでまいりますので、ご支援・ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

全中次期会長に「改革派」奥野氏 (2015年7月3日 朝日新聞)

全国の農協(JA)を束ねる全国農業協同組合中央会(全中)は2日、次期会長に奥野長衛(ちようえ)氏(68)=JA三重中央会会長=が内定したと発表した。万歳(ばんざい)章会長(69)の辞任表明に伴う会長選挙で、中家(なかや)徹氏(65)=全中副会長、JA和歌山中央会会長=との一騎打ちを制した。

奥野氏は「改革派」とされる。同日、東京・大手町で報道陣に「このまま変わらなければ、我々はマンモスのように時代の変化に適応できなくなる」と述べた。

奥野氏は全中に権限が集中するピラミッド型構造を問題視。組織運営改善を強く訴えてきた。会長選では候補一本化を図る動きに応じず、組織の現状に不満を抱える層に支持を広げた。

奥野氏は、1954年の全中発足から14人目の会長となる。初の戦後生まれ。8月11日の臨時総会で就く。任期は万歳氏の残り任期の2017年8月まで。全中は会長選の得票数は明らかにしていない。

農協法改正案では、全中が全国の農協を監査・指導する仕組みの廃止など、権限が大幅に削られる。大規模農家や法人には自力の資材調達や販路開拓といった「農協離れ」も進む。現場の農家のための再建が、新会長の使命となる。(大畑滋生)

おくの・ちようえ 関西大法中退、専業農家などを経て、11年7月からJA三重中央会長、14年8月から全中理事を兼務。68歳。8月11日付。